

「じゃあね、くらう。また明日」

「さよなら、やみひめ。また明日ね」

いつも通りの、ちょっとした名残惜しさを伴う挨拶をして、私はやみひめと別れた。今日はやみひめは、少しだけ様子が違っていた気がする。週末に、やっぱり何かあったのかもしれない。でも、何も言ってくれないのは、私に心配をかけたくないと思ってくれているからで。だったら、やみひめの方から話してくれるまで、私から詮索しない方がいいのかな。

そんな事を考えながら歩いていると、ふと、通りのショーウィンドウに自分の姿が映っている事に気付いた。

「……大きいな」

ショーウィンドウに映った女の子は、ぱっと見た感じだと高校生くらいの容姿だ。

それが私のコンプレックス。

私——クラウ・P・ブランは大きい。

少なくとも小学生には見えない。

長い黒髪の一部が白くなってるけど、別にメッシュを入れている訳じゃなくて、体質の問題で色が抜けているだけ。瞳の色が赤いのも、カラーコンタクトとかじゃない。ただでさえ小学生っぽくないのに、この髪と瞳のせいで、不良みたいに見られる。その上、私はどうも近寄りがたい雰囲気をしているらしく、余計に周りから怖がられてしまう。

「はあ……」

やみひめは『美人さん』って言ってくれるけど、私は自分の容姿が好きじゃない。もつと普通がよかった。そうすれば可愛い服も着られて、周りから怖がられたりもしなかったかもしれない。

「——あの、よかつたら試着してみませんか？」

もう一度溜息を吐いていると、横から声をかけられた。二十代くらいのお洒落な感じのお姉さん。胸に名前の書かれたプレートを付けてる。ショーウィンドウをよくよく見てみると、露出が多めの過激なファッションをしたマネキンが飾られている。

ブティックだ。きつと、このお姉さんは店員で、私が服を眺めていると勘違いしたんだと思う。

「高校生くらいですか？ お客様はスタイルが良いですから、きつとお似合いに——」

「す、すみません。結構です……」

私は店員のお姉さんの言葉を最後まで聞かずに、慌ててショーウィンドウを離れた。お金を持っていないから買えないけど、あんなの着て小学校なんて行ける訳がない。

「……ランドセルをしても気付かないのかな」

また大きく溜息を吐く。

やっぱり、私の容姿で可愛い服なんて似合うはずがない。

——『くらうが着なよ。可愛いのも似合うよ』

気持ちが落ちこみそうになると、やみひめが言ってくれた言葉が脳裏を過った。

そうだ、そんな風に決めつけちゃ駄目だよ。一緒に服を見に行つて、可愛いのを選んでくれると言ってくれた。

やみひめは嘘なんて言わない。

いつも私の事を助けてくれる——大事な友達だから。

思えば、やみひめと出会ってからだいぶ経つ。

私達が友達になったのは三年前。ちょっとした事件がきっかけだった。

サイドストーリー #04

『似た者同士』

私がこの小学校に転校してきたのは、三年生のゴールデンウィーク明けという、微妙な時期だった。数年前まではこの土地に住んでいたので、正確には戻ってきたというべきだろう。

とはいえ、小学校に上がる前に離れてしまったので、この土地に私を知っている子供はいないも同然。そして、毎年クラス替えがあるとはいえ、三年生ともなれば、同学年の生徒の顔くらいは大まかに把握しているものだ。だから、ゴールデンウィークが明けるところには、クラス内の関係性はほぼ出来上がってしまう。

そこに転校生として加わるのは、性格にもよるかもしれないが、ハードルが高いと思う——特に私には。

私は他人ひとよりテンポが遅いというか、話す時、熟考じよくしてしまう癖がある。

これは言うべきかどうか。失礼に当たらないだろうか。

そんな風に考えているうちに、話題が次に移ってしまい、会話に参加でき出来ずに終わってしまう事が多々ある。

周りはそんな私を『寡黙』とか『クール』だと、良い意味で勘違いしてくれる。だから、『暗い』とか言われて、いじめられずに済んだ。

それは私の容姿のせいもある。今ほどじゃないけど、三年生の時には学年で一番背が高かったから。自分では判らないけど、表情や雰囲気も大人っぽいと言われた。私はどちらかと言えば、ぼんやりしているタイプだけど、これも周りが勝手に勘違いしてくれた。

私がいじめられなかったのは、有り体あていに言えば怖がられていたんだと思う。強そうな相手をいじめようとする者はいない。いじめは弱者——少なくとも、自分が『下』に見える相手に対して行うものだから。

転校してきて一週間も経つと、物珍しさで話しかけてくるクラスメイトもいなくなる。前述の通り、私は話すのが得意じゃなく、容姿のせいもあって怖がられてしまうから、これは当然の結果。私は私で、早々にクラスに馴染なじむのをあきらめてしまい、休み時間は文庫本を読んで過ごした。こうしていれば所在なさげに見えないし、相手にも『話しかけて邪魔をしちゃいけない』という口実を与えられる。

クラスでは浮いてしまっているけど、授業中に孤立しない程度にはコミュニケーションをとれた。だから別段、問題もなく、学校生活は送れていた。

ただ、ちよつとだけ気になるクラスメイトが一人いた。視線を感じてそちらを向くと、決まって目が合う女の子。

その子が流遠るしおやみひめだった。

今時珍めずしい、控えめに言えば古風な名前だと思った。

当時から長い黒髪をポニーテールにしている、どちらかと言えばクラスを中心にいるタイプ。

クラスメイト達との関係は良好。だけど、特定の誰かという様子はなくて、特定のグループに属している感じでもない。誰とでも仲良くなれるけど、深い付き合いはしない——それは私と似たスタンスで、勝手に親近感を持っていた。

やみひめも同じだったようで、目が合う事が多かった。

けど、だからといって自分からアプローチをかける事はしない。出来ないからこそ、お互いに、こういうスタンスをとっているのだから。

そんな彼女と関わるきっかけが出来たのは、転校してから半月ほどした五月の終わり頃。国語の授業で、自分の名前の意味を調べるという時間で、辞書を引いて、自分の名前に使われている漢字や言葉の意味を調べるというのが目的で、実際にどういった理由で名付けられたのかを調べるといものではない。

先生も、特に深く考えてはいなかったと思う。出席番号順に結果を発表していき、当時のクラスメイトに『る』より後の文字から始まる苗字の子はいなかったから、やみひめは最後だった。

自分の番が回ってきて、発表するために起立したやみひめの表情は、はっきりと沈んでいた。そこでようやく、先生は自分の迂闊さに気付いたようだが、残りは彼女のみ。露骨に一人だけ免除する訳にもいかず、先生は愚か者のふりをして、やみひめに発表を促した。

何も気付いていないし、他意もありませんよ——と。

『やみひめ』というのは、恐らく『闇姫』という字を当ててるのだろう。『闇』という言葉に良いイメージはないし、『姫』だって、わざわざ本人に意味を説明させるのは野暮でしかない。小学生のメンタルでこれは、公開処刑に等しい状況だ。

先生にしてみれば、何気ない風を装って発表を終わらせ、囃したてる生徒がいれば窘めてやればいいと思っただろう。

やみひめは気丈に、『闇』と『姫』という言葉を持つ意味を発表したが、案の定、数名の男子が『不吉』だの『お姫様だって』だのと騒ぎ始めた。

子供というのは残酷だ。そして、小学三年生には、その残酷性を抑制する理性などない。本能に従って、他人に対する攻撃衝動を露にするだけ。騒ぐ男子生徒数名と、庇おうとする女子生徒数名が口論になり、それを一人で収めようとする先生は無力だった。

そんな喧騒の中、やみひめは起立したまま、ほんの少しだけ顔を俯けていた。普通の子であれば、泣き出してもおかしくない状況なのに、じっと耐えていた。

その表情が私には、自分の名前を馬鹿にされた事より、この状況に心を痛めているように見えた。

流遠るとおやみひめという女の子は、すごく強くて、すごく優しい子なんだと思った。だから——私は出来るだけ大きい音がするように机に辞書を叩きつけて立ち上がり、その音に驚いて静まりかえったクラスメイト達と先生を見回した。きっと、すごく怖い顔をしていたと思うけど、あの時だけは自分の容姿と雰囲気感謝した。内心では、緊張でドキドキしていたけど。

教室中の注目が集まったのを確認して、私はありったけの知識を動員した『解釈』を述べた。不吉なものや縁起の悪いものをあえて身近に置いたり、名前に使ったりして、『魔除まよけ』とする古来の風習。そして『姫』というのは、女の子にとって多くの希望や愛情が込められた字である事。この二つを漢字でなく、ひらがなにする事で、親しみやすさと謙虚さを持ち合わせた名前にした絶妙なセンス。それらを、小学二年生でも理解出来るように懇切丁寧に解説した。

今になって思うと、かなり力技だったようにも思う。私の解説よりも、私があんなにしやべっている事に驚いていた子も多かったかもしれない。ただ、終業のチャイムが鳴るまで、私は独自の解釈による解説を続けた。テンションが上がって、止められなくなっていた。

それ以来、やみひめはクラスメイトから畏敬いけいの念を込めて『姫』と呼ばれるようになり、この話が学校中に広まってからは、下級生からは『姫様』上級生からは『殿下』と呼ばれるようになった。

これが後に〈姫事変〉と呼ばれる事件の全貌ぜんぼう。

以降、私に対するクラスメイトの腫れはものに触るさわような空気も多少は緩和され、困った時は何でも相談出来る『意見番』のようなポジションを確立した。

やみひめとも仲良くなれた。彼女はずっと私に話しかける機会を窺うかがっていたらしく、この件は絶好の機会だったみたい。

私にお礼を言ってくれた時の彼女の笑顔を、私は絶対に忘れないと思う。私に助けられた嬉しさ、私の知識に対する尊敬、そして私の意外な一面を知った驚き、それらが混然一体となった、むしろシンプルな——けど、極上の笑顔を。



「……………うう」

久しぶりに、あの時の事を思い出して恥ずかしくなる。あんな事が出来たのは、私自身が本当に子供で、後先考えてなかったからだと思う。

もし、ああいう状況がまたあったら、私は同じように出来るだろうか。

出来る自分でありたいと思う。私がやみひめを助けられたのは、あの〈姫事変〉の時だけで、それからは私が助けられてばかりだから。

やみひめは、そんな風に思っていないかもしれない。でも、今日みたいに、私は何度も助けられている。私がコンプレックスで沈んだら励ましてくれるし、やみひめがいないと、私は未だにクラスの輪に上手く入れないから。

「相談してほしいな……」

勘違いでなければ、やみひめは何かを抱えている。

頼ってほしい。

解決出来るか判らないけど、せめて一緒に悩むくらいはしたい。

そんな事を思っていると――

「――？」

何か聴こえた気がする。声みたいなの、でも、音じゃない何か。

――タスケテ。

「……………っ!？」

今度ははっきり聴こえた。

『声』だ。

けど、空気の振動じゃない。

まるでテレパシーみたいな、直接、心に届いたような……。

胸がざわつく。

本能が告げている――行くな、危険だと。

でも、だけど……。

勝手に足が進む。

助けを求める声だからというのものもあるけど、引き寄せられている感覚もある。

それから、どんなルートを通ってここに来たのかは覚えていない。

気付けば私は、人気のない建物の一室にいた。教室と同じぐらいの広さだけど、家具も何も置かれてなく、壁もコンクリートの打ちっばなしだから、余計に広く感じられる。空

気が淀んでいて、人の出入りがあるようには思えない。

印象としては『廢墟』だった。

すぐに建物を出ると、それが使われていない廢ビルだと判った。『立ち入り禁止』と書かれた看板には、土地を有者している会社らしき名前がある。

どうしてあんな場所にいたんだろう。

無意識のうちに、侵入者を阻むロープを潜って……。

ここに来た理由があつた気がするんだけど、何も思い出せない。

「……………帰ろう」

私は気味が悪くなって、すぐに家に帰った。

E
N
D

あとがき

どうも、るとおあき流遠亜沙です。

『ゾイヤミ』サイドストーリー#04をお届け致します。

本編を二話掲載する度に、まくあい幕間的にやっていますが、これは当初の予定にはありませんでした。本編が主人公の一人称なので、別のキャラの視点を書けないのは覚悟していたつもりですが……考えが甘かったです。

やはり別のキャラの心情描写もしたくなり、こういったスタイルとなりました。

で——今回はクラウド視点です。僕はクラウドをこういう女の子として捉とらえています。というか、こうだったらいいなという願望ですが、キャラクター原案である紙白さんにも受け入れていただけているようで一安心しております。

放送中のアニメ『アイドルマスター シンデレラガールズ』の長身キャラ・諸星きらりも、こうなんじゃないかと勝手に妄想しています。違うかもですが。イメージとしては、最近で言うと『ロウきゅーぶ!』の香椎愛莉ですかね。コンプレックスがある女の子萌えです。

今回は最後に、ちよつとだけ本編につながるシーンも入れてあります。今後、クラウドがどう物語に絡んでいくのか——ご期待いただけると幸いです。

では、よきところで謝辞を。

ここまで読んでくださった『あなた』と、チェックしてくださっている紙白さんに今回も感謝を。ありがとうございます。

後半戦もお付き合ってください。

2015 / 3 / 29 流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ジイカルやみひめ The NOVEL XXXXXX』小説ページに戻る